

「北海道・北東北の世界文化遺産登録」

		B.C.9,000		B.C.3,000		B.C.1,000		A.D.300		A.D.800		
		B.C.5,000		B.C.2,000		B.C.300		A.D.600		A.D.1,200		
日本	旧石器時代	縄文時代						弥生時代	古墳時代	飛鳥時代	平安時代	鎌倉時代
		草創期	早期	前期	中期	後期	晩期					
北海道	旧石器時代	縄文時代						続縄文文化	擦文文化		アイヌ文化期	
		草創期	早期	前期	中期	後期	晩期		オホーツク文化	トビイロ文化		

本年7月、第44回ユネスコ世界遺産委員会拡大大会において、「北海道・北東北の縄文遺跡群」が北海道初の世界文化遺産として登録されました。

「北海道・北東北の縄文遺跡群」は、豊かな自然の恵みを受けながら1万年以上にわたり採集・漁労・狩猟により定住した縄文時代の人々の生活と精神文化を今に伝える貴重な文化遺産です。北海道、青森県、岩手県、秋田県に所在する17の遺跡で構成されており、北海道には、6つの構成資産（函館市：垣ノ島遺跡、大船遺跡、洞爺湖町：入江・高砂貝塚、伊達市：北黄金貝塚、千歳市：キウス周堤墓群）と関連資産（森町：鷺ノ木遺跡）があります（図1）。

これまで、本シリーズ「縄文・美しい謎」において、各遺跡の魅力などが詳しく紹介されておりますので、本稿では詳述を控えますが、世界遺産登録までのあゆみを振り返るとともに、北海道における「縄文世界遺産」の今後の活用に向けた取組の方向性をご紹介します。

世界遺産登録までのあゆみ

北海道では、平成15（2003）年の「北海道・北東北知事サミット」で合意した「北の縄文文化回廊づくり」を原点として、平成19（2007）年の同サミットにおける共同提案への合意に基づき、4道県及び関係市町をはじめ、民間団体や地域の人々とともに「北海道・北東北の縄文遺跡群」の世界遺産登録に向けた取組を進めてきました。

平成21（2009）年6月には、縄文遺跡群世界遺産登録推進本部等を設置し、平成25（2013）年に初めて推薦書の原案を文化庁に提出。その後、推薦見送りや数回にわたる推薦書の改訂などを経て、令和元（2019）年12月、それまでの取組が実を結んで政府による推薦が決定し、令和2（2020）年1月、ユネスコ（国連教育科学文化機関）に推薦書が提出されたところです。その後、ユネスコの諮問機関であるイコモス（国際記念物遺跡会議）による審査を経て、本年5月にイコモスから世界遺産に登録するよう勧告され、7月に世界文化遺産登録が正式に決定しました。

北海道における縄文世界遺産の活用のあり方

北海道では、本年3月に「北海道における縄文世界遺産の活用のあり方」を策定しました。

世界遺産登録後は、道民の地元に対する誇りや愛着



図1 北海道・北東北の縄文遺産群の遺跡位置

縄文遺跡群」の と今後の活用のあり方

北海道 環境生活部 文化局
文化振興課 縄文世界遺産推進室

が一層深まるとともに、国内外からの来訪者の増加が想定されます。この機会を確実に捉え、北東北3県とさらなる連携を図ることはもちろんのこと、世界遺産登録の効果を地域の賑わいの創出に繋げていくため、行政、地域住民、民間事業者等の各主体が相互に連携して取組を進めることが重要となります。このため、「あり方」では、北海道における縄文世界遺産がめざすべき地域の賑わいとは何か、また、北海道全体にどのように波及させるのか、その将来像を描くとともに、各主体が一体となって将来像の実現に向けた取組を進めるための方向性を示しています。

この「あり方」で用いる「縄文世界遺産」とは、世界遺産登録をめざす「北海道・北東北の縄文遺跡群」のうち、北海道内の6つの構成資産と1つの関連資産を指します。また、「縄文世界遺産」を含む北海道全域に存在する縄文遺跡・文化を総称して「北海道の縄文」と呼ぶこととし、世界遺産登録による縄文文化への注目の高まりを、将来的に道内全域に波及させていく必要があることから、「北海道の縄文」全体の活用が図れるように取組を進めていきたいと考えています。

1 北海道における縄文世界遺産の現状と課題

日本国内には令和3（2021）年7月時点で、25件の世界遺産（文化遺産20件、自然遺産5件）が登録され

ています。

登録後の来訪者の動向は、登録直後に大幅な来訪者の増加が見られる一方で、登録後数年で減少していく事例が見られます。また、「北海道・北東北の縄文遺跡群」と同様のシリアルノミネーション（複数で構成する資産）では、認知度の高い特定の遺産に来訪者が集中する事例が見られます。このほか、その地域の許容量を超える来訪者が訪れることで、地域住民の生活環境の悪化や世界遺産の価値の棄損など、オーバーツーリズムが懸念される状況も見られます。

北海道が抱える課題としては、まず、地域コミュニティの高齢化や人口減少などの影響により、活動を継承していく担い手不足などの活力の低下があります。そして、個別の市町村による情報発信が主体となり、周遊を促進していくための統一的な情報発信が不足していることや、遺跡へのアクセスの向上のため、遺跡までの確実な誘導を図るサインの設置や駐車場の確保などが必要となっています。

また、道が実施したアンケート調査の結果、世界遺産登録の取組への認知度の割合に比べ、実際に遺跡を訪れたことがある割合が低くなっていることから、今後は、情報の受発信や来訪者の属性・興味等に応じた誘客方策、地域への波及効果の拡大などといった、「文化財を中核とした観光まちづくり」の視点を取り入れていくことが必要と考えられます。

そのためには、個々の遺跡からの発信だけではなく、縄文世界遺産をはじめとした道内の縄文遺跡全体が持つ強みや魅力をひとつのストーリーとして構築すること、また、構築したストーリーのもと、各地域（遺跡）ならではのサブストーリーの追加やストーリーを体験出来るコンテンツの制作、実施などを通じて、遺跡の保存と活用による好循環を生み出す仕組みをつくることが重要です。

それらにより、「文化財を中核とした観光まちづくり」が、地域の持続的発展に繋がるという共感の輪を広げ、継続的、自立的に運営できる体制を広域レベルで構築していくことが理想的なあり方と考えます。

2 北海道がめざすもの

【将来像：遺跡でつながる新たな価値創造空間、北海道】

縄文時代の人々は、1万年以上もの長い年月のなか、環境変化に巧みに適応しながら、狩猟・漁労・採集を基盤に自然と向きあい、持続可能なライフスタイルを実現しました。また、本州が稲作を基盤とした弥生文化に移行した後も、北海道に暮らした人々は縄文的な暮らしを守り続けました。

近年、地球環境を保全し、多様性と包摂性のある国際社会の実現に向けた取組が広がるなか、厳しくも豊かな北海道の自然のなかで育まれた「北海道の縄文」の価値に光を当て、その価値を「ストーリー」として紡ぎ、訪れる多くの人々に共感や感動を与えられるよう資源として磨きあげることで、新たな「価値」を創造し、地域に交流と賑わいを創出していくことをめざします。

【キャッチフレーズ：未来へつづく、一万年ストーリー。】

「北海道の縄文」の活用を進め、将来像を実現するためには、何よりも地域住民や遺跡を訪れる人々に価値や魅力を伝え、取組への参加や来訪者からの発信を増やし、大きなうねりとしていくことが必要です。

そのため、「北海道の縄文」の魅力を誰もが理解でき、さらに、惹きつけるコトバとして上記キャッチフレーズを設定し、道民はもとより国内外の多くの人々に向けた発信の場面で使用することとします。

将来像の実現には、これまで「北海道の縄文」を守り、その価値を継承してきた地域の人々をはじめ、行政や民間事業者など多様な主体が、めざすべき方向性を共有し、それぞれの役割を補完しあうことによって取組を進めていくことが重要となります。また、北海道全体で一体感のある取組を展開するためには、以下の3つの基本姿勢を共有しながら進めていくことが大切です（図2）。

将来像の実現に向け、各主体がそれぞれの役割に応じて、また、相互に連携して取組を進めることが重要である一方、これらの取組を持続的に推進していく体制の構築も必要です。

体制の構築については段階的に進めることが必要であり、各主体が参画する連携の場（プラットフォームなど）を構築し、具体的な取組内容の企画・実施を推進します。

将来的には、中核組織が、行政をはじめとした各主体のサポートのもと、事業内容の充実や人材の育成、マーケティングに基づく情報発信や滞在プログラムの提供など、「北海道の縄文」を活かした観光まちづくりを一体的に担っていくことが望まれます。

持続可能な体制を構築していくにあたり、最も重要な位置を占めるのは、組織を導く中核的な人材の存在です。各主体と円滑に連携することはもとより、地域が守り継承してきた縄文遺跡の価値や支えてきた人々の想いを大切に、将来にわたって「北海道の縄文」を活かした取組を地域とともに持続的に進めていくという想いを抱いた人材が担い手となることが重要です。

縄文遺跡群は、SDGsにも通じる持続可能な地域社会の実現を目指す私たちにとって、学ぶべき貴重な示唆が多くある大切な「宝」です。

北海道としては、この世界に認められた「宝」を将来にわたって確実に引き継いでいくため、今後とも、国や関係自治体等と連携し、遺跡群の適切な保存と活用を図ることはもとより、縄文が地域の誇りとなり、北海道の新たな活力に繋がるよう、アイヌ文化や自然、食といった本道が既に持っている「宝」とも連動しながら、関係する方々と一丸となって取り組んでいきたいと考えています。

<p>【基本姿勢 1】 地域が主体</p> <p>これまで「北海道の縄文」を守ってきた「地域の人」が主役となり、コミュニティを再生することで、自らが賑わいの創出に携わることが大切です。</p>
<p>【基本姿勢 2】 来訪者視点の意識</p> <p>「北海道の縄文」の価値を「正しく」伝えることはもとより、来訪者に感動と共感を伝えられる取組であるかを意識することが大切です。</p>
<p>【基本姿勢 3】 持続可能な仕組みづくり</p> <p>「保存」と「活用」が相乗効果を生み出し、将来にわたり持続可能な取組となる仕組みづくりが大切です。</p>

図2 【3つの基本姿勢】